

# 大陸(中支)

## 輜重兵第三連隊警備小隊

### 中支第三師団の戦い

静岡県 佐野重信

私は大正六年六月六日、現在の富士宮市旧上野村大字馬見塚六三三ノ一、農家の一人っ子として生まれました。昭和七年、上野村尋常高等小学校卒、同年四月、青年補修青年訓練所卒業し、兵役に服するまでは自家の農業に従事していました。

昭和十二年徴集兵とし、兵隊検査は十二年五月二十四日受けましたが、当時体重十三貫五〇〇と軽く、第一補充兵となったので農業のかたわら、父が電気工事

士だったので、私も召集されるまでは冬休みの時だけ電気工事人となって修業しました。しかし英語も分ならず、ペンチの使い方も知らない。そのため、本を借りてきて独学で夜間、電気の勉強をしました。

私は一人っ子であるが、小学校皆勤、補修学校皆勤、青年学校も精勤、銃剣術、射撃も満点を取りました。兵隊検査後も苦労はしましたが努力しました。今の子供とは考え方も違って、困れば困るほど精進したものです。貧乏人の子供だったので、農業と電気工事兼業で、自分で言うのもおかしいのですが、親孝行でも有名でした。

昭和十五年五月八日、名古屋の輜重兵第三連隊補充隊へ教育召集、第二中隊第六班に配属、一期の検閲まで、訓練に明け暮れました。馬部隊であるのに馬を挽

いたのは一時だけ、他は歩兵の戦闘訓練ばかりでした。学科では絞られましたが、やる気十分だったものでした。だから便所の中でも勉強しました。したがって一度もビンタをはられたことはありません。

一期の検閲が終わったら、助教から「今日かぎり絞らない」と言われました。召集解除、引き続き臨時召集は六月七日、助教の下士官の言葉は、「お前たちはこれから戦地行きだ」ということの意味を含んでいたのでしょうか。私は小銃訓練は故郷の訓練所で教わっていたので訓練は他の人より楽でした。しかし、留守家族の父母は生活には実に困ったようで、今でいうボランティアの手を借りて日々を送っていたようでした。一期の教育は歩兵は三カ月であるが、我々輜重兵は一カ月で、輜重兵第三連隊補充要員として名古屋の屯営出発、六月十三日神戸港出航、十七日上海通過、揚子江を遡航し、二十日南京上陸、七月十二日南京出発、十六日漢口上陸、二十日本隊着。連隊本部は京漢線の広水に在り連隊長に申告、続いて応山の第三師団司令部で申告、再び広水に戻り、列車で大別山を越え信陽

の第三中隊に配属になりました。

信陽城内には第二十九旅団司令部があり、元の支那軍兵舎には歩兵第三十四連隊が駐屯していたようでした。我々第三中隊は駅前駐屯でした。輜重の一個中隊は歩兵と違って、大体、十個班と本部で一個小隊、一個班二十四人くらい。第一、第二小隊輓馬小隊、第三小隊は歩兵と同じ、一く三分隊軽機関銃、第四分隊擲弾筒、一個分隊、長以下十五人で完全軍装でした。

昭和十三年の漢口攻略戦のときは、一個小隊分の馬を牛に代えて行ったので先輩たちは苦労したらしい。輜重隊は他部隊の援護を受けていましたが、犠牲も多いので連隊長の方針で各中隊は歩兵装備の小隊を編制したともいいます。そのため警備小隊は歩くのに苦労した。一般の歩兵より大変、馬部隊の警備だから。輜重隊は夜行軍では馭兵は馬の尻尾に掴まり、班長は乗馬。

我々警備小隊は行軍中つくづく敵が出ればいいと思つた。だれでも命は惜しいが、馬と一緒に歩く方がつらい。一人で離れて寝たくなつたこともあるが、それ

もできない。寝て置いて置いた兵隊もいました。

昼間、馬部隊は隠蔽することができないから迫撃砲で叩かれると、戦死者や負傷者は放つて置いて前進、前進です。夜になってから五里（二〇キロ）も行った所から収容に戻つて来る。戦死者は担架にして四人で担ぐ。戦死者は物言わぬが、負傷者は痛がる。傷口に蛆がわいている者もいました。収容するまでに死んだ者もいました。戦死者は認識票（真鍮小判型に兵隊の固有番号を刻す）を取つて夜、茶毘（火葬）にする。自分の中隊の者だけでなく他中隊の者があります。

輜重は前線へ弾薬等を輸送した後、小行李に渡すと、空の駄馬へ歩兵の戦死者を両方へ一人ずつ運んで歩兵隊へ渡したこともあります。

作戦に出るときは、食糧（米二〜三升）、衣服を受け取るが、これを携行せず持つものは弾薬と靴下だけ、それなくては体がもたない。したがって食べるものは現地調達です。私は軽機関銃（チェッコ銃）の射手をしていて、スピンドル油が無いので苦労をしました。が、戦闘の時の方が荷物を持っていないから、かえつ

て楽でした（射手が敵から一番狙われて命は危ないけれど）。我々の第三師団は戦闘師団だが山岳戦が多かった。馬部隊は昼は歩けず夜歩くが、道無き道を歩くのだから、特に山砲は馬に砲を分解し搬送するため、馬もろとも崖から落ちることもあります。

輜重兵第三連隊第三中隊編入されたのは、初めに申しましたとおり、昭和十四年七月二十日です。その日から八月十日まで「七月攻勢撃破のための作戦」が開始されました。着任したばかりの我々初年兵はこの作戦には出ませんでしたので、信陽付近の警備についていました。

その後は敵情が良かったので演劇や銃剣術大会があり、私も選手となって師団司令部へ行きました。そのとき、司令部は応山であり、歩兵、野砲兵や輜重兵も行きました。野砲と騎兵には勝つたが工兵には負けました。信陽付近の警備中、ノモンハン事件の情報があり、我が軍は甚大な損害を被つたという、このことは今でも頭から離れません。

十二月になると情勢が悪化し、昭和十四年、冬期作

戦が翌年二月までありましたが、輜重隊は警備となり、私らは第十二分哨という亀山分哨に勤務しました。歩哨以外は雪の中で夜の寝ぐらを作るのですが、寒いから中々雪が掘れなかった。とにかく大雪が二昼夜も続いたのですから、食事、炊事の支度は朝から夕方までかかってようやく朝食の準備が完了するという状態でした。燃料は現場の松の立木を切って使いました。冬季作戦中は歩兵部隊は作戦に出たので、我々師団輜重が残りましたが、信陽地区での警備範囲は広く大変でした。その頃ノモンハン事件のことが会報にも出ました。

冬季作戦が終わって引き続き信陽付近の警備となりました。無蓋車一個列車には十人くらい警乗しましたし、有線の警備もしました。その頃は桃の花も咲き敵情は良くなりました。

次に宜昌作戦のことですが、昭和十五年四月二十九日天長節（現みどりの日）の十一時ごろから出発しました。第二十九旅団と共に師団輜重として行動しました。小作戦では輜重は必要なかったのですが、大作戦

では我々師団輜重が必要です。

五月五日ころ、敵の根拠地の確山を前衛の歩兵部隊は攻撃せず前進した模様で、後続部隊の師団輜重隊はその西方約四キロ地点で迫撃砲の攻撃に遭いました。直ちに前進、夜になって死者、負傷者を收容し、夜の十二時ごろ本隊に到着、直ちに死者を火葬、次いで明日の食事の支度を済ませる。

宜昌作戦中のことですが、騎兵が持ちこたえられないから輜重兵行けといわれましたが、戦車壕だらけで公道が通れず、畑を通って行くのだからなかなか付いて行けない。

六月一日ころ、西方に向かって行軍中、飛行機から通信筒の連絡があった。「敵の砲列六〇門、砲撃準備中、日本軍は直ちに南下せよ」とある。間もなく敵の攻撃があり、これに応戦散開。そのとき駄馬部隊、野戦病院は甚大な損害を被りました。

日は暮れ、戦火が収まると直ちに引き揚げ、本隊を追行。こういう場合こそ腹が減る。眠い、疲れた、すべてを忘れ部隊を迫及しました。戦闘中は特に考える

ことだが、人間、飯を食わぬものならよい、とつくづく思いました。強行軍の続く時はいつもその場に眠りたい、しかも私一人でない、自分で自分を励ますより外にないのです。

飯を炊けと言われるが、炊く暇などない。米が無ければ小麦粉、豌豆を食う。体力のある人は鶏を取ったりすることもしますが、それができない人が多い。朝炊いた飯は夜臭くなるのです。水は泥水で炊く。死体が浮いているクリークの水なのに、それでも食わねば体がもたない。

下痢をして、臭くて後からついて行けない者もいる。また反対に戦闘中には物を食わぬこともあるので便所へ行くのは二三日に一度のこともある。戦闘をしている時の方が楽で、行軍はつらい。物を食いたい、疲れた、眠い眠いの連続です。作戦中の砲撃戦になれば、二日も暇になる時もあります。

七月一日、漢水東側新野南方呂石鎮付近の戦闘について、旅団本部からの話によると第三師団は弾薬が尽きてしまいました。雨がしとしと降っているとき、中

隊長が「お前たちの命はもらった」との声は今でも忘れられません。このとき、敵からの攻撃は激しかったのですが、我々の隊からは戦死者は出ませんでした。

山砲が頭越しに撃つ、第一発は敵の後へ、二発目は我々の前に落ち、三発目はやっと敵に命中しました。

麦畑で私は隊長命で軽機関銃の三発点射を続け、前の土手まで丹羽伍長と共に前進。山砲隊はなげなしの弾を三発正面の敵に撃ち込んでくれたので、敵は退却しました。

部隊は二昼夜ほど東南へ強行軍、着いた所は湖北省襄陽（さうよう）でした。その後糧秣、弾薬を受領、それから漢水のほとりまで押し返しました。クリークの小便水で飯を炊いて食う。ここでも水は泥水、しかも例によって敵の死体が十体ほど浮いていました。

七月十日ころから湖北省襄陽（さうよう）南西方面へ、宜昌（じょうよう）を目指して山岳戦です。軽機関銃を背にして毛無しの山を四つん這いになり登る。食料は調達したソラ豆二升くらいを靴下に詰め、水と豆で山岳を脱出するまで凌ぐ。道無き山、川、それも強行軍のためか輜重隊の駄

馬、山砲の駄馬が砲身ごと谷底へ転落する事故が多発します。

昼は山の稜線から敵の狙撃を受けます。そのため川、山を夜行軍のほかはない。山岳戦に入ってから漢口の独混の輜重隊、野村隊、黒田隊、桑島隊が合流し、我が部隊の後続部隊となりました。しかし、この三個中隊は山岳地帯を脱出する朝、無惨にも全滅したと聞きました。

八月に入るところ、宜昌まで十里（四〇キロ）の地点で、状況中止、宜昌陥落の報がありまして速やかに駐屯、もうその頃は衣類も靴も破れ、乞食同様の姿でした。食事については野も山も蠅の大群、今でも印象に残るのは竹の葉と赤くなっていた瓜の味噌汁の美味さでありました。昭和十六年一月十五口ころから二月二十日までの予南作戦についてちょっと触れてみます。

作戦開始以来一週間後、確山付近で乗馬伝令の情報によると「正面稜線の東側平地を敵の大部隊が南進中。直ちにこれを攻撃せよ」という命令がありました。

稜線の敵が壕の陣地に入ったとき、友軍の速射砲に

攻撃され敵の死者、負傷者が出る。その壕を占領して入るとトーチカもあり、生きている敵もいました。その壕の中から南下する敵部隊を攻撃、夜になって戦火が収まり、我々は本隊を追及する。しかし、どちらへ行つたか分からないので、地面に耳を付け方向を何方か判断する。

確かに本隊は北上中である。北方の空を仰ぐと北極星はいつも同じ位置にある。本隊に合流したころは夜の十一時を回った頃と推定されます。直ちに歩哨勤務、その夜は歩哨交代があつたのか無かつたのか記憶は定かではないが、その場に座つて白霜を被つていました。

この作戦は案外特科隊（歩兵以外の兵科）にとつては敵情は良かったが、冬の作戦は寒さが応える。それに強行軍の連続、二月十七口ころから降雪が三日間、渡河工作しかも外套の裾が凍つて切れてなくなつてしまいました。戦争は命をかけるものだけに楽なものではありません。しかし、体が達者であるなら、今になつてみれば、この苦しみがい出となるものです。

昭和十六年四月二十八日、輜重兵第三連隊補充隊転

属のため信陽出発、二十九日漢口出航、五月七日上海出航、十二日大阪港上陸、同十六日召集解除となりました。

帰宅後農業をしていましたが再召集されず仕舞いです。輻重兵だから召集されなかったのか、私は農耕隊のようなものだから召集されなかったかと思いましたが、終戦後聞いたのですが、何かの間違いか、再召集の予定であったそうです。終戦の陛下の放送は、朝霧高原の戦車学校のあたりで聞いたが、内容は、はっきり分かりませんでした。

部落で「戦争に負けた」と聞きましたが、本気にしなかつた。しかし、確認して馬と馬車を引っ張って家に帰り、そのままにして何をされるか分からぬので一週間何もしないで寝ていました。ところが何もされないで働き出しました。

田圃を一町歩耕していたので、これからは命を取られそうにもないので、冬には専門に耕地整理をしました。そのため八年かかりました。冬は燃料確保と耕地整理、他の者は賭博としゃもの鬮鶏と、人の心が乱れ

ていました。私は耕地整理のおかげで楽になりました。しかし、農業の後継者はいなくなり、三十年ころから電気工事を始め、子供はお陰で今は電気屋をやっています。

軍隊生活も戦後の復興も大変だったが、体さえ達者であれば、いい思い出でもあります。当時の中国の人々にも会いたいと思う。

## 支那事変初期

### 酷しい戦闘を生き抜く

兵庫県 上山 芳雄

私は大正三年八月三十一日、旧朝来郡山口村平野、現在の和田山町殿、農家の生まれでした。昭和九年徴集で、十年一月鳥取の歩兵第四十連隊に入営、寒い所で、雪や雨が降ると演習場は泥だらけ。鳥取連隊の兵隊は砂丘で鍛えられていて、行軍や丘陵登り、兵舎から砂丘までは五、六キロ、鳥取駅から三キロ。毎日が